

中山間地の農業をあきらめない 草で牛を育て、人との交流で農地を守る



今朝生まれたばかりの子牛が初めて母のお乳を探すところ

宮城県大崎市鳴子温泉。温泉とこけしのまちからさらに山形県境へ向かって進むと、山に囲まれた台地に水田の広がる南原地区があります。380年前、伊達藩の新田開発により開削された手掘りの用水路「南原穴堰」が今も継承され、地域の田を潤しています。巧みな技術と水管理が評価され、「世界農業遺産」と「世界かんがい施設遺産」に認定されています。

この地で7haの水稲と肉用牛繁殖13頭の複合経営を家族で営むのは、上野建夫さん（66）。人工授精師でもある上野さんが畜産を担い、長男の滝人さんが田んぼや畑を受け持っています。手づくりの牛舎では、生まれたばかりの子牛が母牛のお乳を探し当てる場面に遭遇しました。牛舎の向かいにあるご自宅の広いリビングで話を伺いました。

—はじめから畜産農家になろうと思ったのですか？

昔から家で牛を飼っていたので牛が好きで、長野県の八ヶ岳農業大学校で畜産を学び、就農しました。父は田んぼに専念していたため、畜産で経営を独立させようと、人工授精師の資格を取りました。そのうち農協から応援を依頼され、専属の人工授精師として農家を回る忙しい日々が始まりました。農家から「早く来てくれ」と電話があると、土日朝も夜も関係なく車で一日に200km走り、年間1300頭の種付けをしていました。

—経営や牛の飼い方で工夫していることは？

40代で父から経営を任されるようになり、米価の低迷は長く続きましたが、コメも牛も相場に左右される



木製電柱を組み立てた手づくりの牛舎にて上野さん

ため、お互いに補完できるのは複合経営のメリットです。粗飼料は100%自給しています。昔から「牛飼いは草づくり」だと教わってきました。向かいの集落で耕作されなくなった田んぼで、牧草を作っています。オーチャードが主力で、イタリアンも混ぜています。10haほどあり結構な面積なので転作の助成金も収入の柱になっています。とにかく農地を荒らさないようにしないといけません。

一名称に「地域の農業をあきらめない」と書かれてあります。この言葉の思いは？

過疎化や高齢化で衰退していく地域農業をどうにか再生できないものかというのが、わたしたち中山間地のテーマです。このあたりは大規模化もできない上に、平場に比べるとおいしいお米は取れないと言わ

れ、悔しい思いをしてきました。このままでは農家が誇りを持ってないと、旧鳴子町役場の職員さんが寒さに強くおいしい品種を探し出し、農家だけでなく地域内外のみんなで作る「鳴子の米プロジェクト」を始めたのです。それまでにもうちでは、移住してきた漆作家さんと「日曜山村学校」という農村文化体験の受け入れをしていたので、まちの人と直接交流する大切さを感じていました。お米は「ゆきむすび」と命名し、あえて「杭掛け」という天日干しをします。いかに手間暇をかけ、作物に心を通わせるかという効率化とは真逆の米づくりをして、ここにしかない「物語」を作っていました。

鳴子の米プロジェクト20年の物語

上野さんがNPO理事長を務める「鳴子の米プロジェクト」は去年、20周年を迎えました。消費者をお客さん扱いするのではなく、仲間としてコミュニティを作り、旅館組合やこけし工人やまちの人たちが農家と一緒に農作業をして、契約販売でお米を買い支えます。単なるお米の売り買いだけではなく、共に地域の田んぼを守るパートナーです。今では田んぼは16haになり、つくり手（農家）は10軒、予約注文する人は700人になり、評判が広まって「おもむき権米衛」との契約も始まりました。

上野さんは、中山間地で同じ悩みを抱えている人は多い。牛がいれば牧草も作れる。田植えも稲刈りも大勢でやると楽しみになります。地域の資源や特色を生かした農業が広がって、中山間地が元気になってほしいと語ってくれました。



ゆきむすび米の予約販売



江戸時代から続く手掘りの用水路「南原穴堰」の前で上野さんと筆者